特集 宗教復興の潮流

閉じる聖地、開く聖地

――「女人禁制／女人結界」をめぐる議論から見えてくるもの

薄井篤子（うすい あつこ）

1 はじめに

今、仏教が「ブーム」だという。確かに、写経、座禅、巡礼などの仏教体験の広がりがメディアでしばしば取りあげられている。一般向けの仏教関連本の出版も相次いでいる。それがどのくらいの層に広がり、根付いたものなのかは計りがたいところがあるが、特定の宗派や組織に属してというのではなく、個人として仏教への共感が広がっている点は注目すべきであろう。[1] では、仏教の何が現代人の心を惹きつけるのであろうか？

忙しい日常の中で、不安や葛藤を抱えたまま生きている自分の現実を見つめる、そこから他者や世界との関係性を見直していくことで平常心を取り戻していく。仏教はそのような自分に向き合う空間と体験を提供するのであろう。この説明はある程度納得できそうだ。個人の感覚的な理解には仏教を単純化する危うさも共存しているだろうが、しかし、言葉に対して信頼を置きにくい現代社会においては言葉の奥にある体験を求める傾向が強まるのも当然かもしれない。また、制度化された教理・儀礼・組織として実態的に把握するだけでは十分ではないという現在の動向も興味深い。伝統的な宗教組織の影響力が後退するように見える反面、「私」を基盤としたアイデンティティや世界観の形成に寄与する文化的資源として仏教が求められているのであろう。そうした昨今のブームは、仏教的な価値観に個人的に共感する人たちが、新たなメディアを使って情報交換をしながら境界線のはっきりしないゆるやかな層を形成している。この動向は伝統的な宗教にも何らかの影響を与えるはずである。

二〇〇四（平成一六）年七月一日に「紀伊山地の霊場と参詣道」がユネスコ世界文化遺産に登録され、脚光を浴びた。この登録は文字化されることなく続いてきた修行体系と、森羅万象に祈り感謝するという宗教的感性が評価されたとも言える。その意味で現在の「仏教の原点への関心」と通じるものがあると感じる。登録がメディアで注目されたのも、日本人が長い時間かけて育んできた感性に立ち戻りたいという現代の精神性を刺激するからであろう。

さて、登録に際しての動きとして大峯山（おおみねさん）の山上ヶ岳に残っている「女人禁制／女人結界」の是非をめぐる議論が活発になったことも忘れてはならない。これもまた、伝統的に守られてきた宗教（の制度）が現代の社会意識とどのように関わっているかという問題と見ることができる。そこで本稿では、大峯山に関する議論の最近に至る経緯やさまざまな立場の動向に注目し、この問題が我々にどのような問いを突きつけているか考えてみたい。そしてそこから現代の宗教動向の一端を検討してみたいと思う。

2 「女人禁制／女人結界」とは何か[2]

「女人禁制」とは、女性が一定の場所へ立ち入ることを禁止するものであるが、それには、月経・妊娠・出産など特定の時間に女性が祭場や社寺へ立ち入ることを禁じて、終了後は解かれる一時期な禁制と、社寺・霊地・山岳といった空間に恒常的に女性の立ち入りを禁ずる永続的な禁制がある。後者には女性の居住や修行を拒否する慣行と「山の結界」がある。神社の場合、女性の拝殿への昇殿を禁じ、男性のみに参加を限定する行事も多く、その周囲や祭場への女性の立ち入りも制限される。寺院でも、東大寺二月堂のように外陣は許可するが内陣は禁制とする箇所がある。「山の結界」とは、女人結界を境界としてそれ以上への登拝を禁じることで、女人禁制の中で最も長く影響を及ぼしたと言えよう。

山を修行の場として神仏と交流しようとする修験道は、山を「女人禁制／女人結界」としたので、日本の霊山のほとんどは明治に至るまで禁制を維持してきた。明治政府は近代化政策を進めるにあたって「女人禁制／女人結界」を封建的で遅れた慣行とみなし、一八七二（明治五）年三月二七日に「神仏仏閣ノ地ニテ女人結界之場所有之候処、自今被廃止条、登山参詣等可為勝手ノ事」（太政官布告九八号）との布告を出した。各地の山では女人禁制を解除したが、強い抵抗も見られたので、一八七八（明治一一）年二月二日、政府は解禁の是非は宗規に委ねると通達した。その結果、徐々に解禁していった山々が多かったものの、変化せず維持されてきた場所もあった。

大峯山の「女人禁制／女人結界」

大峯山は紀伊半島の中央部、吉野から熊野に至る巨大な山塊の総称であり、役小角を開祖とする修験道の根本道場となっている。そのうち奈良県の山上ヶ岳（標高一七一九メートル）は現在も女性の入山を禁止している。

明治以後の神仏分離の時代を経て、山上本堂（旧山上蔵王堂）の管理は、吉野の喜蔵院、桜本坊、竹林院、東南院の吉野側四ヶ寺、山麓の洞川地区の壇那寺・龍泉寺の計五ヶ寺が護寺院として行なうようになった。さらに八嶋役講と呼ばれる都市の登拝講が管理に加わった。各役講、一名ずつを信徒総代として山上本堂の運営に当たり、戸開式と戸閉式を受け持って本堂の鍵の管理を任されている。山上本堂は一九四二（昭和一七）年五月に大峯山寺と改称し、天台・真言の両属寺院となった。護持院、八嶋役講、地元吉野・洞川住民の信徒総代による共同管理という複雑な状況が「女人禁制／女人結界」問題の困難さにも影響している。

吉野側は明治初期に女性の登拝を許可しようとしたが、洞川の強硬な反対で維持されている。一九六〇（昭和三五）年には龍泉寺が本堂の落慶を期に境内の女人禁制を解いた。一九七〇（昭和四五）年五月二日以降は、女人結界を吉野側は五番関まで一二キロ、洞川側は清浄大橋東詰まで二キロ移動させたので、境界の地に立つ母子堂は意味を失った。清浄大橋の脇には「大峯山女人遙拝

所」が設けられ、鳥居を通して山上ヶ岳を拝むことになる。結界門も作り直され、清浄大橋、阿弥陀森（脇の宿）、五番関、レンゲ辻の四ヶ所に「女人結界門」と日本語と英語で書かれた大きな立看板が建てられている。[3] 山上ヶ岳は五月三日の戸開式から九月二二日の戸閉式までは山上に修験や管理人がいるが、この時期以外は無人となる。

古くは一九〇二（明治三五）年に葛城神社の社司の娘が、一九二九（昭和四）年には大阪の二人の女性が登拝を試みている（後者は途中で強制退去）。地元ではこれらの登山を解禁としては認めていない。大峯山寺が明確に日時を定めて布告を出すことで正式に開放されることになるというのが大方の見解である。だが、実際のところ、結界はかなり世俗的実用的な理由で移動している。その是非が問われる時期も、一九三二（昭和七）年一〇月八日に大峯山一帯が国立公園の候補地に決定して以来、社会の変動や外部の評価と密接に連動している。具体的には一九三六（昭和一一）年の国立公園の指定、一九四五（昭和二〇）年の敗戦後の男女同権、登山・観光ブーム、一九七〇（昭和四五）年の大阪・万博博覧会、以下で触れる二〇〇〇（平成一二）年の役行者一三〇〇年大遠忌などである。

外部からの問いかけによって内部でも討議が活発になりはするが、概ね関係者は危機感を強め、むしろ絶対解禁反対・禁制維持の意志を強化させてきた。「女人禁制／女人結界」が守られてきた理由として、月経や出産を血の穢れとして不浄視して清浄な山岳や寺院への出入りを禁じるとか、男性が修行する場に女性がいると性的な誘惑を引き起こして妨げとなるという説明がなされてきたが、現代は女性差別であり男女同権に反するとして糾弾する声が多く、代わりに「伝統」や「慣習」という答えが多くなっている。大峯山は山岳修行の原点を残す最後の砦としてその唯一性を誇りとしている。そして、「女人禁制／女人結界」は、地域の生活や信仰生活の中に埋め込まれている「無謬なる伝統」として位置づけられてきた。しかし、どのような理由であろうとも、「女人禁制／女人結界」は男性側から女性側に押し付けた排除の論理で成り立っているのは事実である。